

世帯特性に着目した高校生の交通安全意識と価値観に関する研究

前橋工科大学 学生会員 ○大峽 巧
 前橋工科大学 正会員 森田 哲夫
 前橋市都市計画課 正会員 塚田 伸也

1. はじめに

我が国の交通事故死者数は年々減少しているが、いまだに多くの人が交通事故で死傷しており依然として厳しい状況にある。群馬県は信号機のない横断歩道での自動車の一時停止率が低く、1人あたりの事故件数が高い。また群馬県の高校生は事故に遭う確率が全国で最も高い。交通安全対策には交通安全にかかわる主体の役割分担と連携強化、学校や家庭での交通安全への取り組みが重要である。

本研究では安全意識および世帯特性に着目した。子は親に認識する価値観に影響を受けて育つ¹⁾。過去に交通安全意識を対象とした研究はいくつかある²⁾³⁾が、世帯特性や価値観を考慮した研究は無い。本研究では、世帯特性や価値観が、高校生の交通安全意識に与える影響を把握することを目的とする。

2. 研究方法

(1)調査対象

調査対象の藤岡北高校は専門学科を持つ高校である。生物生産科（バイオビジネスコース、フードビジネスコース）、環境土木科（環境工学コース、ガーデニングコース）、ヒューマン・サービス科（園芸福祉コース、フローラルライフコース）の3学科6コースに分かれており、全ての生徒を対象とする。

(2)アンケート調査の概要

既存研究²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾の調査項目を参考に、あらかじめ因子を想定しながら調査票を設計した。7項目からなる。調査概要を表-1に示す。

(3)データ体系

世帯特性や価値観が、高校生の交通安全意識に与える影響を、図-1のように仮説として設定した。

3. 分析結果

(1)基礎集計による分析

通学に自動車を利用している生徒は95%であり、自転車交通安全への意識が高いと感じている生徒は多い。藤岡北高校は2019年度2回交通安全に関す

表-1 アンケート調査概要

調査名	日常生活と交通安全に関するアンケート調査	
調査日	2019年10月18日	
調査対象	藤岡北高校2学年の生徒（約120名） 3学科6コース全て対象	
調査内容	1)個人属性	学科、コース、クラス、性別、居住地、通学手段、事故経験、免許取得意向
	2)世帯属性	世帯構成、兄弟、親出身地、親職業、コースに近い職業家族有無
	3)親子の接触	会話、SNS、食事、プレゼント、外出、総合評価
	4)交通安全意識	危険認知、マナー、通学、安全教育、総合評価
	5)生活意識	部活、教師、学業、友人、将来、ルール、総合評価
	6)親との信頼関係	信頼関係、心理的分離、心遣い、安心感、総合評価
	7)親の信念	理論、社会、経済、自己主張、消極、享楽、総合評価
調査方法	紙面にて一括配布・回収	
調査結果	109票回収	

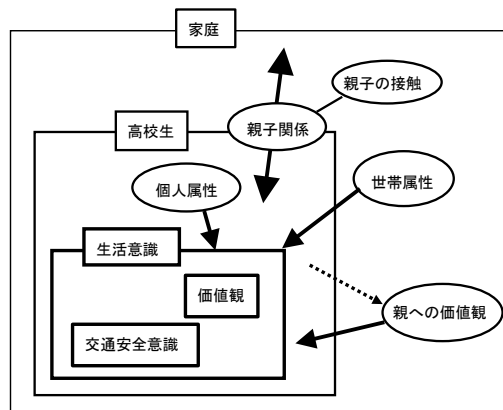


図-1 データ体系（仮説設定）

る講座を開催しており、安全マナー項目について意識が高い結果を得た。親との交流が多いと感じる生徒も多く、信頼関係を感じている生徒も多い。

親子間の交流が多いほど、親との信頼関係が良くなる。個人属性別には、男子生徒より女子生徒、親と祖父母と住む3世代構成、2人兄弟で交流が多く信頼関係が良い結果となった。また子との交流が多くなる専業主婦などの家庭では信頼関係が良くなるが、自立の項目は低い結果となった。

キーワード 高校生、世帯特性、親子関係、交通安全、価値観

連絡先 〒371-0816 群馬県前橋市上佐鳥町460-1 前橋工科大学 地域・交通計画研究室 TEL. 027-265-7362 E-mail: tmorita@maebashi-it.ac.jp

(2)交通安全意識に関する因子分析

各意識項目において因子を抽出した。交通安全意識の因子抽出結果を表-2に示す。バリマックス回転後の因子負荷量行列より因子を抽出し、得られた因子得点を用いて属性別の因子傾向をみた。親と祖父母と住む3世代では、安全教育意識や将来意識、友人関係、学校生活の因子に対して意識が高い結果となった。また親と交流が多いほど交通安全におけるマナー遵守や危険認知および将来意識や友人関係、学校生活において意識が高い。以上より、家庭での交流が多い生徒ほど、生活意識の一部に対して意識の向上が考えられる。交通安全に関しても、マナーや危険認知について意識が高いことが分かった。

次に、目的変数を各項目の総合評価、説明変数を抽出された因子の因子得点を用いて重回帰分析を行った。親子接触においては客観的変数であることと項目数の少なさから、項目をそのまま説明変数に用いた。結果として、会話頻度の増加や親子で外出す

表-2 交通安全意識因子抽出結果

変数	因子1	因子2	因子3	因子4
(7)一人一人がマナーを守るべき	0.9276	0.1489	0.1965	0.0394
(8)自動車のドライバーもマナーを守るべき	0.8310	0.0895	0.2235	0.1520
(5)マナーを守って自転車に乗るべき	0.7521	0.2244	0.2052	0.0787
(9)自分の身は自分で守らなければならない	0.5451	0.2532	0.3723	0.1151
(11)行政はもっと自転車の交通安全に取り組むべき	0.1546	0.8897	0.2099	0.2515
(12)社会全体で自転車の交通安全に取り組むべき	0.2727	0.8239	0.1502	0.2292
(10)学校で自転車の交通安全に取り組むべき	0.2907	0.6606	0.2658	0.2757
(6)マナーを守るのは格好いい	0.4269	0.3040	0.2537	-0.0548
(15)他の自転車に気をつけて通学している	0.3971	0.1253	0.8350	0.0968
(14)自動車や歩行者に気をつけて通学している	0.4599	0.0937	0.7236	0.0480
(13)時間に余裕を持って通学している	0.0724	0.1738	0.4800	0.0124
(16)通学中の危険箇所注意到意して通学している	0.4732	0.2601	0.4751	-0.0062
(1)自分が交通事故にあうかもしれない	-0.0058	0.0649	0.1683	0.8364
(2)自分が他人にケガをさせるかもしれない	0.0213	0.1273	0.0669	0.7771
(3)自分の自転車の運転は危ない	-0.0136	0.1610	-0.0745	0.5494
(4)他の高校生の自転車の運転は危ない	0.2178	0.1094	-0.0005	0.5175
固有値	3.4253	2.3246	2.1863	2.1239
寄与率	21.41%	14.53%	13.66%	13.27%
累積寄与率	21.41%	35.94%	49.60%	62.88%
因子名	マナー遵守意識	安全教育意識	通学安全行動	危険認知

表-3 総合評価「親との交流が多い」を目的変数とした重回帰分析の結果

変数	偏回帰係数	有意性の検定		*: P<0.05 **: P<0.01
		F 値	t 値	
会話頻度	0.7563	56.6563	7.5270	**
SNS連絡頻度	0.0771	1.0423	1.0209	
朝ご飯	0.0948	5.1052	2.2595	*
外出	0.3180	26.7072	5.1679	**
定数項	-0.9162	9.5146	-3.0846	**

表-4 交通安全意識の総合評価を目的変数とした重回帰分析の結果

変数	偏回帰係数	有意性の検定		*: P<0.05 **: P<0.01
		F 値	t 値	
マナー遵守意識	0.2735	17.6171	4.1973	**
安全教育意識	0.2437	13.8544	3.7222	**
通学安全行動	0.4499	44.1573	6.6451	**
定数項	3.7787	3673.4438	60.6089	**

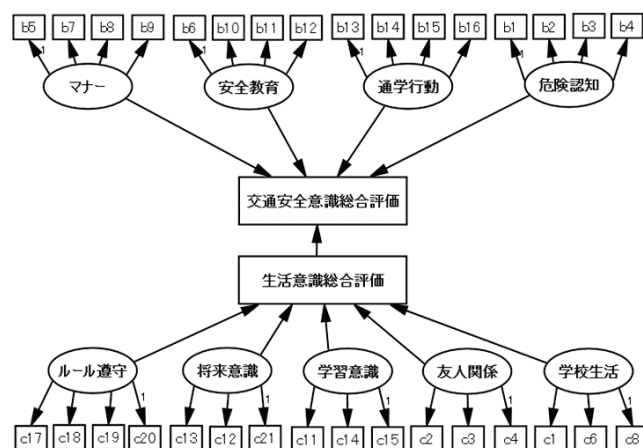


図-2 共分散構造分析のパス図

ることが、親子交流の深まりに影響が大きいことがわかる（表-3）。高校生の交通安全意識には、通学中に他の自転車や自動車に気をつけているなどの安全行動の影響が大きい（表-4）。生活意識については、部活や先生、また学校へ行くのが楽しいという学校生活での項目の満足度につながるということがわかった。

(3)意識構造要因分析

交通安全意識につながる意識構造を検証するため、共分散構造分析を行った（図-2）。因子分析より抽出した因子を潜在変数として用いて、各項目で得た総合評価を観測変数に加え、交通安全意識に影響を与える要因をパス図により分析した。

4. まとめ

高校生の自転車での交通安全意識や生活意識、その他世帯に影響する意識について把握し、影響を与える世帯の特性および意識項目について明らかとなった。交通事故の多さに注目される近年において、事故件数を減らしていくために家庭における子との交流が重要であることを示すことができた。

参考文献

- 1) 森下正康:子どもの親に対する親和性と親子間の価値観および性格の類似性, 心理学研究, Vol.50, No.3, p.145-152, 1979
- 2) 金井昌信, 片田敏考, 大橋啓造:高校生を対象とした交通ハザードマップを用いた交通安全教育の効果と課題, 土木計画学研究・論文集, No.23, pp.1001-1010, 2006
- 3) 小林光希, 森田哲夫, 湯沢昭:市立前橋高校における教育実践を通じた生徒の交通安全教育の評価に関する研究, 第46回土木学会関東支部技術研究発表会講演概要集, CD-ROM (IV-33) 2019
- 4) 浅川潔司, 森井洋子, 古川雅文, 上地安昭:高校生の学校生活適応感に関する研究—高校生活適応感尺度作成の試み—, 兵庫教育大学, 研究紀要, Vol.22, pp.37-40, 2002
- 5) 水本深喜:青年期後期の子と親との関係—精神的自立と親密性からみた父子・父娘・母子・母娘間差—, 教育心理学研究, Vol.66, No.2, pp.111-126, 2018
- 6) 青木考悦:大学生の価値類型について, 心理学研究, Vol.41, No.2, pp.893-89, 1970